

# バングラデシュからの手紙 2002年1月

ブラザー・フランクからのメッセージ

## 友人のみなさんへ

ブラザー・フランクより

2002年1月 マイメンシン(バングラデシュ)にて

長い間、わたしたちはイスラム教徒の間で生活してきました。この国の1億3千万人といわれる人口の内、ヒンズー教徒、仏教徒、キリスト教徒は少数派で、キリスト者の数は50万人ほどです。このわずかなキリスト者が、とても残念なことに、50ほどの教会やグループに分かれていて、それぞれ強い特徴を打ち出しています。それとほぼ同じ数の仏教徒は南部に多く、また人口の10%ほどを占めるヒンズー教徒は全土にわたって暮らしています。

ここ数年間、イスラム教徒の間に信仰の復興が見られます。これは「アラビア化」とも言える動きです。ますます多くの婦人や若い女性(とくに高い教育を受けた女性たち)が、ブルガ(顔を隠す布)を身に付けるようになり、また、きれいで色合いに富んだサリーは反イスラム的と見なされることが多くなりました。ラマダンと呼ばれる30日間の断食も以前より厳しく守られるようになりました。

多くのモスクに毎日人が溢れ、金曜日には、溢れ出た人たちが祈れるよう道にまでマットが敷かれることもあるほどです。このように集まるのは男性だけで、女性たちは家で祈ります。彼女たちの多くはとても信仰深いのです。イスラムの戒律に厳格に従うようにという圧力はますます強くなっています。このような機運から生まれた世界的な連帯意識はここ数年強くなり、人々はそこに属することに誇りを感じています。

このテゼの家では、常にイスラム教に対して深い敬意を表してきました。わたしたちの6つの小学校(最近、もっとも見放されていたスラムに新しい小学校を始めました)の子どもたちのほとんどはイスラム教徒で、わずかな数のヒンズー教徒の子どもたちもいます。CCH(障害者のためのコミュニティセンター)を通してわたしたちが仕えている障害者のほとんどすべてはイスラム教徒です。

さらに毎月一回、知的障害者とその親たち(特に夫が遠くに行ってしまう母親たち)の集会を開いて、そこではお祭りや互いの重荷や喜びを分かち合うときもたれるのですが、ここに集う家族のほとんどはイスラム教徒です。毎日早朝に医療的な助けを求めてこの家の門をたたいた貧しい婦人たちや子どもたちのほとんどもイスラム教徒です。

長い間のここでのわたしたちの存在を通して、信頼関係が育ちました。いつも一緒に働こうとしているのです。イスラム教、ヒンズー教、仏教、キリスト教に属する人たちが一緒に働き生きてゆこうとしています。互いへの敬意と、一致を模索する心は、貧しい人々や見放されている人々をここに歓迎し、一緒にそのような人々に仕えることを可能にしてくれました。それぞれの宗教を大切にしながら他者への愛を生きようとしてきました。

ニューヨークそしてアフガニスタンで起きたことは、このわたしたちの互いへの信頼と理解の道に新しい計画をもたらしました。11月から12月にかけてのラマダン(30日間の断食)の間、わたしたち自身もこのラマダンに加わりました。ある人は毎日、またある人は毎金曜日にこのテゼの家で断食に加わりました。昼食の時間には聖堂に集まり、平和と調和を求めて祈りました。

この断食によって浮いた食費は近隣の貧しいイスラム教徒に提供されました。一日の終わりには近隣の人々を招いて、共に一握りのムリ(米菓子)と果物を食べ、断食を終える伝統的な宴「イフタ」のときを一緒に過ごしました。

みなさんに、わたしたちの近くに住む人を何人かを紹介したいと思います。彼らはわたしたちにとって大切な人たちです。みなさんの心の中にも住んでもらえるかもしれません。

そんな人たちの一人は「チャチャ」です。叔父さんとも呼べる方です。今はすっかり老人になりました。白いひげをはやし、白いイスラムの縁なし帽と長いシャツをいつもまとった熱心なイスラム教徒です。彼は家族と共にブラマプトラ川の向こう岸でテゼの家から北に5キロほど離れたボロビラという村に住んでいます。夫人(チャチ)、そして息子さんたちやその家族と一緒に、竹と干し草の家をいくつか作り、寄り添って生活しています。

チャチャのおかげで、10年ほど前にわたしたちは、そのころはほとんどだれも読み書きができなかったこの村に小学校を始めることができました。現在この学校には300人ほどの子どもたちがいて、また母親学級によって多くの母親たちが簡単な文字を読み書きできるようになりました。そのようにしてチャチャはわたしたちの友人になりました。適切な助言をしてくれる深い知恵の持ち主です。ブラ

ザーたち全員がこのテゼの家を空けなくてはならないとき、チャチャとチャチがこの家に数日間住んでくれます。この聖堂で彼は日々の祈りをささげ、客人にはお茶を振る舞います。

数年前のことです。警察官がときどきわたしたちの所を調べにきていました。ここにいつも貧しいイスラム教徒、青年たちや子どもたちが訪ねてくるのを見て、わたしたちが彼らをキリスト教徒に改宗させようとしているのだろうと考えたのです。ある日警官がやって来たとき、ちょうどチャチャがわたしたちと一緒にいました。

そこでわたしはチャチャにわたしたちのことをどう思っているか、ここにわたしたちが住んでいることをどう感じているかを、その警官に話してくれるように頼みました。チャチャはこう警官に話したのです。「このブラザーたちは、わたしやあなたよりも立派なイスラム教徒だよ。アラーの神は何よりも他者へのあわれみによってたたえられるんだ。そのことを、このブラザーたちは、その生き方や貧しい人たちを助けることで示しているんだからね。」この警察官はそれ以後来なくなりました。

アイシャという若い婦人のことも紹介します。バングラデシュの貧しい家では当たり前のように、彼女もとても若いときに結婚しました。まもなく結婚生活は悲惨なものになりました。夫から暴力を受ける日が続き、絶望した彼女は自殺しようと考え、とうとう列車に飛び込んだのです。彼女は生き残りました。しかし両足を失いました。

わたしたちはときどきこの町の大きな病院を訪問します。そこにはいたるところに病人がいます。すべてのベッドは一杯で、ベッドとベッドの間の床にも、そして廊下にも病人が横たわっています。長期間そこにいる人もいます。帰る家がないのです。アイシャもそうでした。両足を失った彼女に行くところがあったのでしょうか。彼女の両親はとても貧しく、アイシャが戻ってくるのをいやがりました。もう一人養うほどの余裕がないのです。もちろん夫の所に戻ることもできません。

そのころわたしたちのCCH(障害者のコミュニティセンター)では、女性障害者がカーペットを作る小さな作業所を始めました。わたしたちはそこにアイシャを招き入れ、彼女の新しい人生が始まりました。彼女はそれを通してわずかな収入を得るようになり、両親も彼女を受け入れました。車椅子が与えられたアイシャは、それに乗ってマイメンシンのスラムの小さな家から毎日通うようになりました。アイシャは冗談を言い、そして歌うこともあります。両足があったときよりも今のほうが幸せだと彼女は言うのです。

ヌルジャンも紹介します。初めて彼女に会ったとき、

彼女は川向こうの、壁もない小さな小屋に住んでいて、もう目が見えなくなっていました。バングラデシュではよくあるように、夫が離れ去り他の女性と一緒になっていました。ヌルジャンには知的に障害のある娘さんがいました。物乞いをしながら日々の糧を何とか得ていたのです。

数年前、わたしたちは貧しい人たちの小屋を竹で補修することを始めました。そのときわたしたちが最初に取り組んだ小屋の一つがヌルジャンの小屋でした。竹で壁を作り、しっかりとした青色のプラスチックの屋根がつけられました。そしてわたしたちとの長い関係が始まりました。

最初彼女は、杖で道を探しながらときどき訪ねて来ました。いつも何かのお土産をもってきてくれました。彼女のニワトリが生んだ卵二つ、6月ならば自分の小屋の近くのマンゴーの木から取ったマンゴー数個。わたしたちも彼女が日々の糧に困らないようにお米とダル(れんず豆のスープ)を分かち合いました。そしてもう歩けなくなったとき、彼女のところを訪ねるようになりました。

数カ月前、彼女の村からある人がすばらしい雄鶏をこのテゼの家にもって来ました。彼はこう言うのです。「ブラザー、ヌルジャンがさきほど亡くなりました。亡くなる前にヌルジャンはわたしにこの雄鶏をブラザーの所に届けるようにと言いました。これはヌルジャンに残ったただ一つ物でした。ヌルジャンは言いました。ブラザーは自分の母親のようにわたしを世話してくれたと。」

わたしたちがバングラデシュに住むようになって25年が過ぎました。この年月に、やるべきことはたくさんあり、多くの落胆、そしてしばしば絶望も体験しました。しかしこの年月は同時に、チャチャ、アイシャ、ヌルジャン、そして実に多くの人々によって豊かにされ、心を暖められた年月だったのです。皆さんも、これらの隣人たちのことを少し知っていただいたことによって、同じように感じてくださったらと思います。

日本のみなさん、オランダのみなさん、そしてテゼのわたしたちの兄弟のおかげで、わたしたちはこれからも貧しい人々、イスラム教徒の隣人たちと分かち合って生きていきます。マザー・テレサは言いました。「愛のために働くこと、それは平和を生み出します」と。それは同時に信頼のために働くことです。今の世界はまさにこの信頼を何よりも必要としています。

このマイメンシンのテゼの家から、みなさんの新しい年の祝福を祈ります。今年、どこにいても、わたしたちすべてがこの言葉を生きることができるようにと祈ります。「愛しなさい。あなたの生き方すべてで愛しなさい。」

ブラザー・フランク